

第2節 美園遺跡の弥生時代前期集落

岡 本 敏 行

1 はじめに

美園遺跡では、今回の調査で弥生時代前期の集落の存在が明らかになった。しかも、集落の中心部を南北に調査した形となり、その実体をある程度把握することができた。この集落の時期は、厳密には弥生時代前期から中期初頭までの時期である。しかし、出土遺物には縄文時代晩期のものから弥生時代中期初頭（畿内第Ⅱ様式）までのものがあり、その大半は前期新段階に属するものであることから、集落の中心時期もこの時期であったと思われる。また、遺構の重複関係より3もしくは4時期に分けることができるが、遺物の出土状況からは、それを明確にすることはできなかった。おそらく連続的に営まれたものと思われる。

以下、美園集落のあり方を検討してみよう。

2 立地

美園遺跡はいうまでもなく、河内平野の沖積地に位置している。一般に沖積地における集落の立地は自然堤防の微高地上に営まれていると想定されてきた。事実、美園遺跡では、長瀬川によって形成された自然堤防地点に位置している。しかし、これはあくまでも現在の自然堤防であり、美園遺跡の前期弥生集落が営まれていた時期が、同じように自然堤防であったとはかぎらない。むしろそうでなかった可能性のほうが強いであろう。なぜならば、現自然堤防の形成は、長瀬川が、現地点を流れるようになったのちで、10世紀以後本格的に形成されたものと思われるからである。⁽¹⁾ 当時の長瀬川がどこを流れていたかは、現在までの調査では、小流路はいくつか検出されているが、明確にはされていない。

美園の弥生前期集落、特に居住区と考えられる地域（B地区）は縄文時代晩期の自然河川の上に位置している。この河川は、上流より砂の堆積をもたらし、まわりの地形よりわずかに高く砂洲状の微高地を形成している。集落はまさにこの上に位置しているのである。

河内平野のような沖積地での集落の立地条件は、まず洪水等から集落を守ることも大事であるが、第1に水はけのよいところが最良の条件であったと思われる。そして、次に集落の位置が決定した後に、洪水等から集落を防ぐために、環濠のような溝をめぐる土木工事が行なわれたと想定される。このような観点から美園の弥生前期集落は、水はけの良い、旧河川上の砂の上に位置し、しかも周辺よりも若干高いことからある程度の乾燥状態をつくりだしていたものと思われる。なぜならば、下層の旧河川及びそこに堆積している砂は、そのまま暗渠的役割を果たしているからである。

このような立地条件は、その後の古墳時代前期集落においても同様で、下層に弥生時代中期の河川が流れていたところに立地し（B地区ではB NR 202の上層、C地区ではC NR 201の上層

で、それぞれ、古墳時代前期の集落が検出されている。)、また、南接する佐堂遺跡の古墳時代前期集落でも同様のことが指摘されている。⁽²⁾ 今後、沖積地における集落の立地を再検討してみる必要がある。

ところで、美園の弥生前期集落の立地する砂洲状の微高地は、南側が高く、北側へゆるやかに傾斜している。これは、地形によるもので、旧河川の流れの方向のためである。周辺には、大和川水系の長瀬川やその支流が幾条にも流れ、美園周辺は、これらの河川の氾濫原であり、水田耕作を生業とする当時の人々にとっては絶好の生活舞台を提供していたことはいままでのことであろう。なお、ボーリングデータによると美園遺跡の下層、T.P.-10m 前後のところで低位段丘相当層時期の古長瀬川が検出されており、さらにその上層で砂礫層がレンズ状に厚く堆積していることから⁽³⁾、元来から、この地点が周辺の地域よりレベルが高く、しかも水はけがよかったのかもしれない。

3 集落の構造

(1) 集落の範囲

A地区のANR201の南側からB地区南端のBSD253の間で遺構がほぼ全面で検出されていることから、この範囲が集落の中心部分であったと思われる。すなわち、集落の北限はANR201によって画され、南限はBSD253によって画されている。この河川及び溝の外側では、集落に関する遺構はほとんど検出されていない。よって南北約200mの範囲が集落であったことがわかる。

東西の範囲については、トレンチ幅が狭かったことから明確にしがたいが、集落の立地する砂洲状の地形から70m前後であったと想定される。したがって、美園の弥生前期集落は南北約200m、東西約70mの南北に長い集落であったことがわかる。

(2) 居住区

住居 住居は14棟検出したが、すべて堅穴住居で、同じ沖積平野に立地する山賀遺跡とは異なる⁽⁴⁾。住居址群がA・B・Cの3群に分かれることはすでに第Ⅳ章第2節第2項1のB地区のところで述べた。すなわち、北側のA群(BSI201~203)、中央部南よりのB群(BSI204・205)、そして南側のC群(BSI206~214)である。この内、B群の住居跡は他の群と異なり最も古く方形でしかも小さいことから、実際に住居であったかどうかは不明である。もしかすると工房的な建物であったかもしれない。A群とC群は円形もしくは楕円形の住居で、床面積は14.5~27.0㎡と異なる。これらA・Cの各群が、近藤義郎のいう「単位集団」で、都出比呂志のいうところの「世帯共同体」⁽⁵⁾であろう。そして、A群とC群の結合体、すなわち美園集落全体が、1つの農業共同体を形成していたと考えられる。⁽⁶⁾

倉庫 4棟検出された掘立柱建物が、高床式の倉庫であったと思われる。しかし、柱穴や柱根の残るピットが多数あることから、従来はもっと多くの建物があったと考えられる。これら4棟の高床式倉庫は、住居址群同様のA・B・Cの3群に別けることができる。すなわち、各群ごと

に倉庫をもち、各群ごとに倉庫を管理していたものと思われる。倉庫の面積は2.6～4.8㎡でそれぞれ異なり、しかも、A群とB群の倉庫が、1間四方のほぼ正方形であるのに対して、C群では、間数が1間以上あり、長方形を呈し、若干大きいようである。これは、各群の収穫高によるものであろうか。

井戸 不思議なことに井戸は1基も検出されなかった。美園の弥生前期集落は前述のように、旧河川の砂の上に位置していることから、掘っても水がすぐ抜けるのではなかろうか。井戸がなくても集落が営まれているということは、水が比較的入手しやすいということであろう。ということは、近くに長瀬川等の水を豊富にたたえた河川が流れていたということと、おそらくそこからひっぱってきた溝がいくつかあったのであろう。

溝 集落内からは多数の溝が検出された。これらの大半は、集落内の排水が主要な機能であったとともに、井戸のかわりをするような常時水をたたえていたような溝もあったと思われる。現に埋土が粘土や粘質土である溝が多いことから、あまり水流のない滞水した状態で徐々に埋没していった溝が多かったことがわかる。しかし、B S D253のように砂のみが堆積するような、一時にかなりの量の水が流れたことを物語るような溝もある。また、B S D242のように排水機能を有するとともに、C住居址群の北を画する溝もある。さらに集落を画する溝として前述のB S D253がある。この溝は南側だけを画するもので環濠とはならないが、集落自体は、北側にA N R201、東・西側が低湿地帯であり、南側を画することによって自然の環濠状集落となるのである。

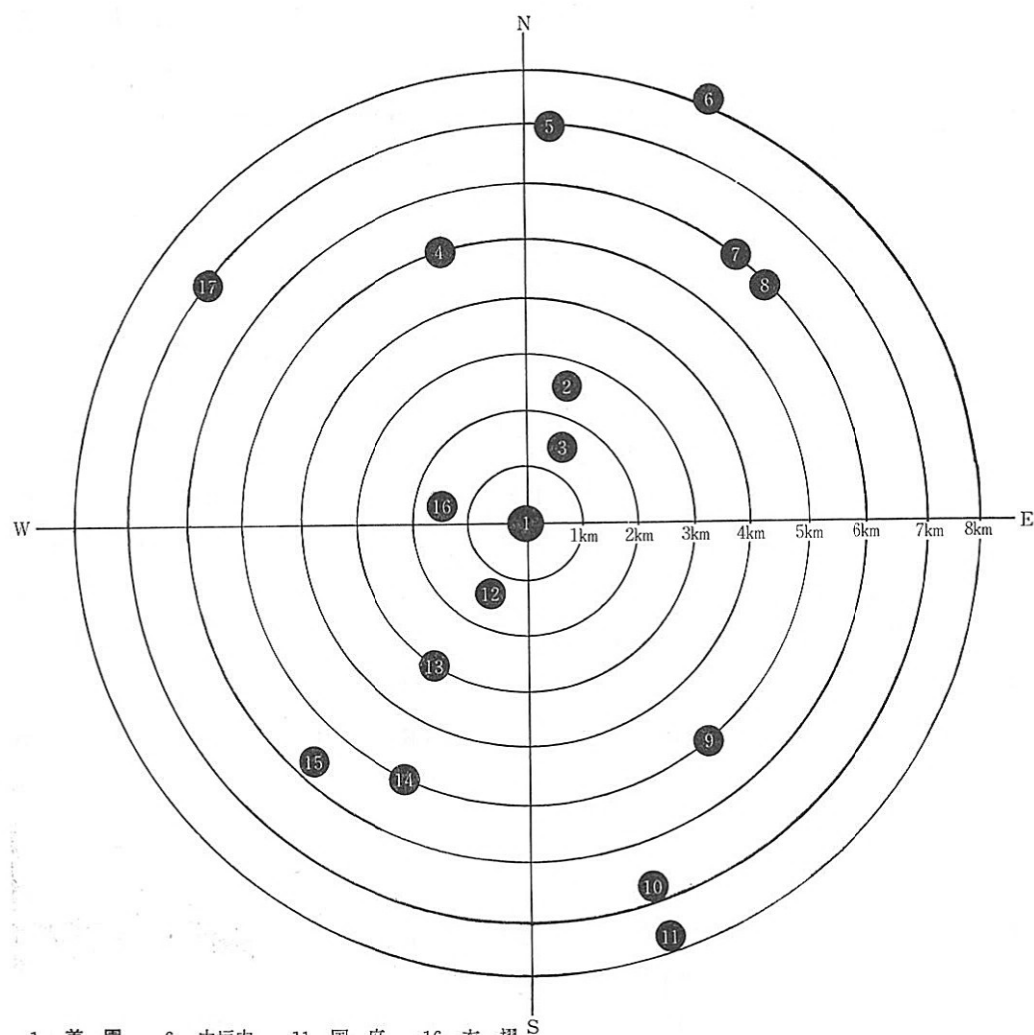
その他 工房跡の可能性としてB S I 204・205及びB S K269、B S X207がある。また、B S K258とB S K260は、住居跡に近接していること、遺物の出土状況や出土遺物から廃棄物処理用の土坑であったと思われる。

(3) 生業

水田 水田は、集落の北側A S D201より北側で検出された。この水田は近接する友井東遺跡に続いており、間に100mほどの沼状の湿地帯があるものの、山賀集落の水田とはほぼ接していることになる。⁽⁷⁾もしかすると共同で耕していた可能性があり、用水路などは、共同で掘削し、利用していたことは十分に考えられる。⁽⁸⁾このように集落と集落が結合することによって政治的結合体が生まれたのかもしれない。また、集落の南限であるB S D253の南からC地区にかけて、湿地帯が広がっていることからやはり水田があった可能性がある。もし水田があったならばC S D201は用水路的機能を有した溝であったと想定される。このように考えるならば、集落の東側も西側も、長瀬川水系の氾濫原であり、湿地帯であることから水田であった可能性が強い。すなわち、集落の周辺はすべて水田であったと考えられる。

狩猟・漁撈 狩猟の場としては東側の生駒山麓が考えられ、動物性蛋白としてはイノシシやシカを主として食していたようで、これらの骨が多数出土している。漁撈は河内湖や周辺の河川を利用していたと考えられるが、山賀遺跡のようにヤスや釜、たも、土鍾が全く出土していないことから漁撈はあまりさかんでなかったようである。ただ、浮きに使用していたと考えられる孔あ

きの軽石が出土していることを指摘しておきたい。またB S K 258やB S K 260からセタシジミの貝殻が多数出土していることから、近くの川から取ってきて食べたものと思われる。



- | | | | |
|--------|---------|---------|---------|
| 1. 美 園 | 6. 中垣内 | 11. 国 府 | 16. 衣 摺 |
| 2. 瓜生堂 | 7. 鬼虎川 | 12. 久宝寺 | 17. 森ノ宮 |
| 3. 山 賀 | 8. 鬼 塚 | 13. 亀 井 | |
| 4. 高井田 | 9. 恩 智 | 14. 長 原 | |
| 5. 諸 福 | 10. 船 橋 | 15. 瓜 破 | |

第394図 美園集落と周辺の縄文時代晩期から弥生時代前期主要集落の位置関係図

(4)墓域

集落の中央部で木棺墓1基(B S X202)と土壙墓3基(B S X203・204・206)を検出した。この地域が、墓域であるとは、かならずしも断定できない。ただA住居址群とC住居址群の間であることと、集落のまわりが、水田もしくは湿地帯であることを考え合せば、集落の中央部分が墓域であってもおかしくはない。また、方形周溝墓は、現在のところ、その可能性があるものが1基(B S D201)あるものの、確実なものは現在検出されていない。今のところ河内平野

では、弥生時代前期の方形周溝墓が検出されていないことから、稲作の始まった弥生時代前期では中期以後のように、階層分化が明確になされていなかったのかもしれない。

4 周辺集落との関係

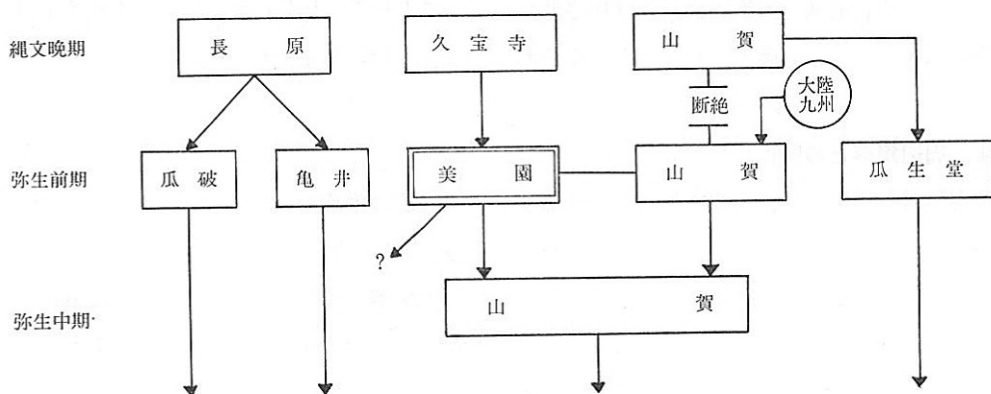
美園集落の周辺には、第394図でもわかるように同時期の集落が多数近接して存在していることがわかる。これらの集落は、おそらく環境の持つ包容力の限界を越えないかぎり、隣接集団との争いは生じることはなかったと思われる。⁽⁹⁾むしろ美園集落などは山賀集落と耕作面が接しており、導水施設の関係から共同で耕していた可能性もある。このような集落と集落が結びつくことによって政治的結合体が生まれてきたものであろう。

また、これら周辺の集落とは当然交流が盛んに行なわれたものと考えられる。事実、生駒西麓産の土器や、二上山周辺でしか産出しないサヌカイト製の石器が多数出土していることからわかる。さらに土器の中には、遠く近江系の土器や、山口県響灘沿岸地域の土器が出土していることや石庖丁などは、紀ノ川水系産の緑色結晶片岩製や、淀川水系産の粘板岩製のものもあることからすでにこれらの地域とも交流がもたれていたことが想定される。しかし、サヌカイト製の石器については、原石や剥片が大量に出土していることと、剥片の中には接合が可能なものもあることから、美園集落の人々はおそらく直接二上山周辺までサヌカイト原石を採集にでかけたものと推定する。そして、その原石を持ち帰り美園集落内で石器製作を行っていたのではなかろうか。すなわち、この時期は石材産出地に個別的に出向いて採集するという縄文時代以来と同じ形であり、弥生時代中期以降のような自分たちで集落の周辺を開拓した土地の専有権あるいは所有権がいまだ明確に確立されていなかったのではなかろうか。

5 集落の推移—結語にかえて—

美園地域における集落の出現は、縄文時代晩期の土器片が少量ではあるが出土していることから、縄文時代晩期までさかのぼる可能性がある。しかし、本格的な集落の出現は、やはり弥生時代前期になってからであろう。この前期に出現した集落は中期初頭（畿内第Ⅱ様式の時期）にはすでに廃絶してしまうが、遺構面上には40cmの厚さで、遺物包含層が形成されていることから、洪水などによって一時に消滅したのでないことがわかる。では、美園集落はなぜ消滅したのであろうか。ここに1つの仮説をたててみることにしたい。

生駒西麓地域は別として、この地域の縄文時代晩期の集落には長原遺跡、久宝寺遺跡、山賀遺跡が想定される。山賀遺跡は、その後弥生時代前期の集落が営まれているが、そこには縄文時代晩期からの連続性はなく、明らかに断絶があるとされる。⁽¹⁰⁾すなわち、長原遺跡や久宝寺北遺跡では、少量ではあるが、弥生時代前期土器（古段階～中段階のもの）が混在して出土していることから、ある程度の連続性が考えられるが、山賀遺跡の前期集落からは縄文晩期の土器が全く出土していない。縄文晩期の山賀集落の人々は、河内湖の汀線が後退することによって、より河内湖



第395図 美園弥生前期集落と周辺集落の推移関係

に近い瓜生堂や、さらには高井田や新家周辺に移動していったのではなかろうか。これらの人々が、後の瓜生堂遺跡や高井田遺跡、新家遺跡の弥生集落を形成した人々と理解したい。

一方、弥生時代前期の山賀集落は、新たに稲作をもたらした大陸もしくは一度九州に上陸してから再びこの地に移住してきた渡来人たちがつくった集落と考えたい。彼らは、稲作のみならず従来の竪穴住居とは異なる掘立柱建物や縄文式土器とは異なる弥生式土器をもたらした。この新技術をもった、前期の山賀集落の出現によって、長原や久宝寺北の縄文人たちは大きな影響を受けたことは想像できる。そして彼らもしだいに狩猟生活から稲作へと変化していたものと思われる。長原遺跡や久宝寺北遺跡では、縄文土器出土の割合に比べて弥生前期の土器が極めて少ない。そこで考えられるのが、彼らは、より水田農耕の営みやすい地域へ移動したのではないかということである。

大胆な仮説であるが、長原の人々は瓜破と亀井に別れ、そして、久宝寺北の人々は、約1 Km北の当美園地域に移動したのではなかろうか。瓜破と亀井に移住した人々は、その後瓜生堂などと共に大規模な弥生集落を形成したものと思われる。同様に美園地域における人々も既述のような弥生前期集落を形成していったのである。特に美園地域は山賀集落に近く影響も大であったことから、水田経営も共同で行なうようになり、しだいに山賀集落に吸収されていったのではなかろうか。

しかし、美園集落では弥生中期初頭（畿内第Ⅱ様式）の時期になって、北側の水田地帯が、友井東遺跡で検出された弥生時代中期の大規模な自然河川⁽¹¹⁾及びその氾濫によって崩壊してしまったため美園地域では生活ができなくなり、集落はしだいに消滅し、集落の人々は二手に分れていったと推測する。一方は山賀集落に吸収され、もう一方は山賀ムラの分村として美園地域の東もしくは南東地域に新たに集落を形成したものと思われる。この分村した集落が後の美園遺跡の南側で検出した弥生時代中期集落を形成した集団であったと考えたい。また、美園旧集落地域は、その後の人口増加にともなって水田化されていったようである。BSA201等の畦畔は、この時期のものである。

その後、弥生時代中～後期にかけて美園周辺は、大規模な河川の氾濫により、沖積化がいつそうはげしくなり、この時期に1.5mもの堆積層を形成させ、再びこの地域に本格的な集落が営まれるようになるのは古墳時代前期になってからである。

以上、美園遺跡の調査成果から集落のあり方を検討してみたが、整理が終わっていない現段階では、それを十分に検討することができなかった。整理が進むにつれて、新知見も得られると思うので、後日改めて検討することを約束したい。

- 註(1) 長瀬川が現地点を流れるようになったのは10世紀以後とされる。〔阪田育功「河内平野の形成と河川の変遷—長瀬川流域を中心に—」『佐堂』(その2—1) 大阪府教育委員会・(財)大阪文化財センター 1984年。〕
- (2) 阪田育功「河内平野における古墳時代前期集落の成立変遷」前掲註(1)所収。
- (3) (財)大阪文化財センター編『亀井・城山』1981年の第10図による。
- (4) 美園遺跡より約1.5km北側に位置する山賀遺跡では、すべて掘立柱建物である。〔大阪府教育委員会・(財)大阪文化財センター「山賀」(その3) 1984年〕なお、住居が異なるのは、美園地域が山賀地域より、より乾燥していたためか、または、山賀集落の人々が、美園集落の人々とはまったく異なった人々であったのか(例えば、大陸から直接稲作をもたらした人々の集落)はわからない。しかし、後者については、魅力ある意見である。
- (5) 近藤義郎「共同体と単位集団」『考古学研究』6巻1号 1959年。
- (6) 都出比呂志「農業共同体と首長権—階級形成の日本的特質—」『講座日本史』1.古代国家 1970年。
- (7) 亀島重則編『友井東』(その1)大阪府教育委員会・(財)大阪文化財センター 1984年。
- (8) 生田維道編『山賀』(その4)大阪府教育委員会・(財)大阪文化財センター 1984年。
- (9) 酒井龍一「弥生中期社会の形成—畿内社会の形成とその構造—」『歴史公論』3 1983年。
- (10) 西口陽一編『山賀』(その3)大阪府教育委員会・(財)大阪文化財センター 1984年。
- (11) 註(7)に同じ。